



読山原フィッシャー学術調査 2005

Yunzanbaru Fissures Research Project

更新世の人類化石として有名な港川人発見地点の対岸に
港川同様の石灰岩台地が広がっている。

玉城村の志堅原、読山原地区である。

石灰岩が採掘された跡地に、港川フィッシャー同様
多くのフィッシャーが走っている。

港川人について 2

読山原の採石場 3

読山原フィッシャー群の調査 4



2005年2月23日

読山原フィッシャー学術調査団



港川人について

港川人(みなとがわじん)は、1970～1971年に沖縄島南部の具志頭村(ぐしかみそん)港川の石灰岩(栗石)採石場で、地元の化石研究家大山盛保氏(OK運輸)によって発見されました。この場所は雄樋川(ゆうひがわ)の右岸にある石灰岩フィッシャー(裂け目)で、内部の堆積物から多くの動物化石とともに9体分の化石人骨が出土しました。年代は、暦年代(注1)によれば、2万年前(注2)で、考古学的には後期旧石器時代、地質学的には後期更新世の末期、人類進化史では新人(ホモ・サピエンス)段階に入ります。港川人は、ヒト化石骨の標本としては、東アジアで最も良好な化石群で、特に1号人(男性)は全身骨格が揃った貴重な資料です。

しかし残念なことに、港川フィッシャーからは彼らが使用した「石器」などの人工遺物が発見されませんでした。その後史跡整備を目標に、1998～2001年具志頭村によって新たな発掘調査が行われましたが、旧石器や新たなヒト化石は出土しませんでした。ただ上層部で縄文時代の遺物(土器:写真)が単独出土し、この場所で先史人の生活活動があったことは確かめられました(港川遺跡として登録)。しかし沖縄県では、この港川フィッシャーを遺跡登録(注3)するまでには至っていません。

注1 暦年代...近年、C14年代は別の年代測定法(年輪年代法、U-Th年代等)との照合によって、較正(キャリブレーション)されるようになりました。較正された年代を「暦年代(カレンダーエイジ)」と言います。ちなみにC14の測定値が17,000年前の場合は、暦年代で約20,000年前に相当します。

注2 2万年前...港川人包含層出土の炭化物C14年代測定で、18,250年前(±650、TK-99)、16,600年前(±300、TK-142)と出されています。また人骨自体のウラン系列年代測定(ウラン-プロトアクチニウム)で、19,200年前(±1,800)の値もあります。ちなみに、人骨のフッ素含量は0.9～1.7%であり、上記年代観と矛盾するものではありません。

注3 遺跡登録...「埋蔵文化財」を包蔵する土地として確認された場合、教育委員会はその場所を登録し、台帳と遺跡地図に記載します。また正式に「遺跡」として周知・登録された場所は、一般に公示され閲覧することが出来ます。



港川遺跡出土の土器



読山原のフィッシャー 4d

読山原の採石場



読山原出土の磨製石斧

港川フィッシャーの対岸（雄樋川左岸）台地は玉城村（たまぐすくそん）に位置しますが、この地域も古くから石灰岩採石場が広がっていました。雄樋川と奥武島の間位置する、大字志堅原（しけんばる）小字読山原（ゆんざんばる）は、緩やかに海に向かって傾斜する石灰岩台地です。現在は採石により広く開削され、石灰岩断面に多くのフィッシャーが観察されます。これらは港川フィッシャーと同様の環境下で形成されたと考えられるため、港川同様の「人類遺跡」が発見される可能性が大きいのです。さらに、まだ本格的な解明が行われていない「フィッシャー」の成因や形成過程、フィッシャー内層序の調査研究を進展させる、重要な資料が得られる事も期待されます。



読山原の調査地区

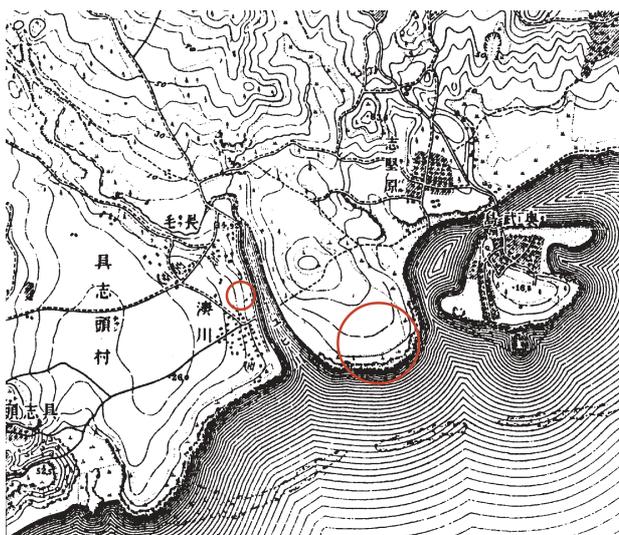


読山原フィッシャー群の調査

この度、地元の事業者武村 茂氏(武村石材建設)の要望と協力を得て、読山原におけるフィッシャー群の現地調査を行える事になりました。調査組織は、グループ・ニライカナイ、武村石材建設、パリノ・サーヴェイ調査研究部、武蔵考古学研究所、玉城村教育委員会、さらに地元沖縄県考古学関係者の参加・協力のもと、「読山原フィッシャー学術調査団(団長:小田静夫)」を結成して実施するものです。調査は2005年2月23日から約1週間を要し、第1次調査を行う予定です。

調査の目標は、第一にフィッシャーの学術調査(注4)であり、主に地質学的な資料を記録する作業になります。第二に化石や人工遺物の確認ですが、当面は読山原フィッシャー群の科学的な資料化を目標にします。

過去に、フィッシャー6付近で「磨製石斧」が発見されています。この資料は、現在の研究で縄文時代草創期(約1万年前)の可能性が推定されています。対岸の港川フィッシャーでも上層部から縄文時代の土器が出土していますから、この読山原フィッシャーでも同様の土器文化の発見が期待されます。



陸地測量部作成地形図(大正8年)



国土地理院発行2万5千分の1地形図「知念」



読山原フィッシャー学術調査2005

発行日 2005年2月23日

発行者 読山原フィッシャー学術調査団

注4 学術調査...発掘調査は、その目的で大きく緊急調査と学術調査に分類されます。緊急調査は開発などで遺跡が破壊される場合に行われるもので、学術調査は研究や遺跡確認、範囲確定などを前提にしたものです。

